

夢追い人列伝

その九 「藤井房雄伝」

初めに

山口県バスケットボールの歴史において、「日本一」となったチームは三つある。平成 28 年、男子山口教員団が全日本教員選手権大会で優勝したことは記憶に新しい。その前に、女子・大島商船高専が全国高専体育大会で、平成 14 年から平成 20 年の間に 4 連覇を含む 5 回の優勝を果たしている。そして、さらに遡ること 23 年、昭和 54 年に松江市で行われた全国中学校選抜大会で、初めて山口県のチームとして「日本一」となったのが下関市立彦島中学校男子バスケットボール部である。監督は、藤井房雄氏。彦島中学校に着任してわずか 3 年目であった。夢追い人列伝その九では、この快挙を成し遂げた 29 歳の若き指導者の足跡を辿る。



藤井 房雄 (ふじい ふさお)

昭和 24 年 1 月生まれ・山口県下関市在住

順天堂大学卒業

一般社団法人山口県バスケットボール協会 副会長

元山口県公立中学校教員 (昭和 47 年 4 月～平成 22 年 3 月)



1 バスケットボールとの出会い

藤井房雄氏の実家は、^{とよら}豊浦郡^{ほうほく}豊北町 (現・下関市豊北町) の山間部の農家である。地元の^{たすき}豊北町立田耕中学校 (現・豊北中) に入学した藤井少年は、野球部に入りたかったが、母親の野球部に対する印象が悪かったのか「野球部はやめとけ」と言われ、一つ年上の従兄弟のいたバスケットボール部に入部した。中学 3 年のとき、担任でバスケット部の顧問でもあった大森和男氏から「^{とよら}豊浦が強いから、お前豊浦に行ってバスケットやってみるか」と勧められ豊浦高校への進学を決めた。将来の目標は保健体育教師で、バスケットを続けたいとは考えていたが、それ以上に、中学校時代勝利の味を知らなかった藤井少年にとっては「強いから」の言葉が大きな決め手となった。ただ、「強い」ことはわかったが、豊浦高校が県下屈指の強豪校であることを、田舎の中学生が知る由もなかった。それどころか、豊浦高校がどこにあるのかさえ知らなかった。漢字は同じだが、^{とよら}豊浦高校は周防灘に面した下関市長府にあり、^{とよら}響灘に面した県の北西部に位置する^{とよら}豊浦郡豊北町からは随分離れていた。校区外だったため、豊浦高校は 3% 卒の難関であった。それにも関わらず顧問が勧めたのは、藤井少年の素質を見込み、親交のあった豊浦高の渡辺一平氏に託したかったのであろう。

無事に豊浦高校に入学したが、通学には苦勞した。自宅から 5 キロ離れた長門二見駅に出て、山陰本線で下関駅へ向かい、そこから学校までは当時市内を走っていた路面電車を利用した。優に 2 時間以上の長旅である。3 年間、往復 5 時間をかけて通学した。

入学してバスケット部に入部した藤井少年は、練習の様子に目を見張った。次から次に進むメニューを部員が黙々とこなしていく。スマートな豊浦のバスケットは、自分がやっ

てきた田舎のバスケットとは、月とすっぽんであった。「新入部員が30人ぐらいはいたと思うが、間違いなく自分が一番下手だった。レイアップシュートさえ知らなかったのだから」と藤井氏は語る。しかし持ち前の負けん気で見つめるうちに頭角を現していった。30人いた同学年の部員は、4人になっていた。

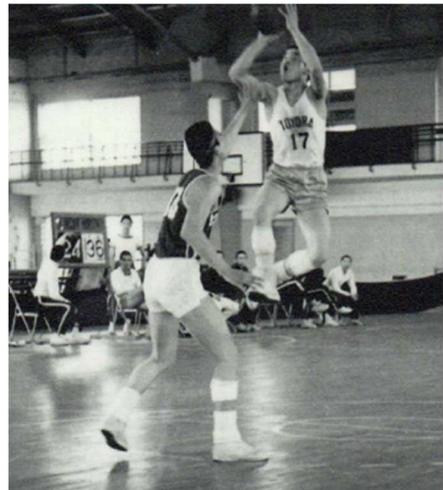
一つ上は、渡辺氏のもとで長くコーチを務めた吉永兼夫氏をはじめ能力の高い選手が揃い、インターハイでベスト8の結果を残した学年だった。2年生の藤井氏は、控えの選手だった。

翌年、藤井氏が3年になった年は、県総体の決勝で、宇部商業高校に惜敗し、全国には手が届かなかった。決勝の後半残り10分（当時は20分のハーフ制）、同点の時点でファウルアウトしたことが今でも悔やまれると言う。「その時は、何のために豊浦に来たのかと暫く無気力状態が続いたが、今となっては、あのとき負けたことがどれだけ自分を励ましてくれたか計り知れない」と、大きな発奮材料であったことを明かした。

当時の写真が一枚残っている。見事なジャンプ力である。

豊浦高校卒業後は、関東学生の雄・順天堂大学に進学した。しかし、大学のチームではほとんど活動していない。それは、腰痛という爆弾を抱えていたからである。その代わり、大学の監督の斡旋で、近くの中学校や高校のバスケットボール部のコーチをさせてもらった。そのことが将来のための貴重な経験となった。

帰郷後は、教員団でプレーしたが、腰痛には最後まで悩まされ、救急搬送や入院も経験した。定年退職後の63歳で手術するまで、腰痛との付き合いは続いた。



2 ^{とんだ}富田中学校

大学卒業後、山口県に戻り、長府中学校での1年の臨時採用ののちに新南陽市（現周南市）の富田中学校に着任し、バスケット部の顧問となった。当時、中学男子では、山根定治氏率いる柳井中と岩崎克之助氏率いる華西中（のち桑山中）が強かった。藤井氏は、どうすれば両氏に勝てるか、両氏にない自分のメリットは何だろうかと考え、達した結論が「独身の自分には、使える時間が多くある。時間をかけて、とにかく練習しよう」だった。教え子の広崎博之氏（山口県社会人バスケットボール連盟理事長）によると、「いつまでもあると思うな盆と正月」が合い言葉で、お盆と正月以外は休みはなく、毎日1時間の朝練も欠かさなかった。体育館はなく、屋外での練習が終わった後、剣道部や卓球部の練習が終わるのを待って講堂で練習した。リングがないのでパス練習などの基礎練習に限られた。講堂の薄い窓ガラスを何枚割ったかわからない。講堂が使えない時は、愛車「いすゞ117クーペ」のヘッドライトをつけ、ボールに石灰を塗ってグラウンドで練習した。ブリジストン勤務の友人から入手した古タイヤが生徒を鍛えるのに役に立った。「自分たちがタイヤを引っ張って2メンや3メンをやったので、コートはいつも整地されていた」と広崎氏は語る。

藤井氏は、3年で県優勝が目標だった。1年目は結果は出なかったが、2年目に秋季県体で3位になり、手応えを感じた。講堂にひょっこり姿を見せた渡辺一平氏に「こうしてきちんと練習していれば、いつか勝てる時が来る」と励まされたのもこの頃である。

しかし、3年目は、勝負どころで惜敗し、優勝にあと一步届かず、中国大会出場も逃した。自分の指導力もここまでかと思ひ、僻地の中学校への転勤希望を書いた。「自分が田舎で育っただけに、田舎の子でもやればできることを、子どもたちと一緒に証明したい。子どもたちには自信をもって生きていって欲しい」と考えたからである。しかし校長からは、「世の中には、恩返しという言葉がある」「県で優勝したら、下関に帰してやる」と言われた。そして4年目に、春季県体と山口県選手権大会そして秋季県体と、全ての県大会で優勝して恩返しを果たし、下関市への転勤を許された。



富田中学校卒業アルバムから（広崎氏提供）

3 彦島中学校

満を持して着任した地元・下関の彦島中学校。初めて見たチームは、サイズはあったが技術的には低かった。当時、彦島地区にミニバスはなく、初心者の集団だった。藤井氏は新チームの選手集めから始めた。当時の彦島中1年は、13クラス550名。運動能力の高そうな子に端から声をかけた。このときに集められたメンバーが、後に全国制覇を果たすことになる。

練習は、基礎的なプレーから積み上げていきたいところだが、素人集団なので時間が足りない。そこで、まず実戦させて、そこから必要なものを引き出して練習させ、また実戦にフィードバックするという手法を採った。「練習のための練習はしない」という指導者は多いが、藤井氏の練習は「実戦のための実戦」の繰り返しであった。練習試合の数は半端ではなかった。招待試合で九州の強豪校とも対戦したし、市内の高校や大学も相手をしてくれた。その中で、「10点差を3分で追いつけ」など、様々な条件をつけた。こういう練習をしておけば、ゲームでどんな事態が起きても対処出来る。藤井氏は、練習を図書館の本に例える。すなわち、図書館に本を蓄積しておけば、いつでも必要な知識を引き出すことが出来る。

夏休みは、強化練習を行った。昼間は練習と勉強。夜に練習試合をして、理科室にゴザを敷いて寝かせた。彦島中や豊浦高のOB、大学の後輩などが毎晩相手をしてくれた。あるときのメンバーは、豊浦卒業生で後に日本鉱業で活躍した玉井和典、同じく豊浦卒業生の小西哲也、植野淳一、児玉典彦、原守彦の5氏。その豪華さには目を見張る。富田中の卒業生が参加してくれたこともあった。

チームはめきめきと力をつけていき、着任2年目には、選手権で準優勝。決勝で桑山中に敗れた。3年目も準優勝。この年は柳井中に敗れ、中国選手権に臨んだのである。

当時の「全中」は、16チームによるトーナメントで行われていた。中国地区の出場枠は「1」で、出場するには中国選手権で優勝するしかなかった。当時、島根県の強さが群を抜いており、第1回から第8回までの中国選手権はすべて島根県の中学校が優勝していた。しかし第9回は、開催県枠で全中の出場権を得ていた島根県1位の松江三中が出場しなかったため、大きなチャンスであった。決勝で、県の決勝で苦杯をなめさせられた柳井中学校と再び死闘を繰り広げ、1点差で勝利し、雪辱を果たすとともに、全国の切符を手にした。実は、県選手権の決勝の時から中国選手権の決勝を想定して練っていた秘策が見事に当たったのである。

4 松江全中

初めての全国大会。1回戦、2回戦と快調に勝ち進み、準決勝で石川県の根上中との対戦となった。根上中は全国大会の常連で、この大会でも優勝候補。大会に来て初めて根上中を見た時、藤井氏は「日本は広い。こんなバランスの取れた素晴らしいチームもあるんだ」と驚嘆した。準決勝で戦うことになり、「勝てる相手ではない。対戦出来るだけで幸せだ」と思った。ところが、いざ

試合が始まると競り合いとなり、29-26の3点ビハインドで前半終了。「このまま競り合いが続けば、いずれ、どちらかがリズムを崩す。相手がリズムを崩すまで選手が辛抱しきれぬかがカギだ」と藤井氏は考えた。後半はシーソーゲームとなったが、最後に50-49の1点差で勝利した。「最後の緊迫した場面で、『図書館の本』が役に立った」と語る。

続く決勝も、地元の大声援を受ける松江三中を相手に大接戦となった。前半26-26のタイスコアで折り返し、後半も競り合ったものの、途中から抜け出し、最後は14点差をつけて、悲願の優勝を手にした。

残り2秒、1秒。バーンとタイムアップを告げるピストルの音が場内に鳴り響いた。56-42。彦島中の快勝だ。ガッツポーズの藤井コーチ。その顔は涙と喜びでくちやくちやだ。勝利の感激に抱きあう選手達。そしてコートサイドからは2階席から飛び降りたOB達が次々に藤井コーチの元に向け寄る。もうもみくちゃだ。涙がとめどもなくあふれてくる。

(月刊バスケットボールイラストレイテッド 1979年11月号より)



第9回全国中学校バスケットボール選抜大会
昭和54年8月20日～23日 松江市

1回戦 彦島 55-40 浅間 (長野)
2回戦 彦島 58-47 友部 (茨城)
準決勝 彦島 50-49 根上 (石川)
決勝 彦島 56-42 松江三 (島根)

月刊誌では「無欲が呼んだ初の栄冠」と謳われた。事実、全中出場を決めるまでは「全国に出る」ことが目標で、出場が決まったあとは「1回戦くらいは勝ちたい」に変わったが、日本一になることなど考えもしなかったそうである。明日が決勝という晩、一睡も出来なかった。宍道湖畔を歩きながらゲームプランを考えるがまとまらない。「まあ、子どもが何とかするじゃろ」くらいに考えて、ふと気がついた。「待てよ。明日勝ったら日本一じゃあや！」このときはじめて「日本一」を意識したと言う。

実は、全中の4試合のすべてを交代なしの5人で戦っている。当時2年生でベンチに座っていた林哲郎氏(早鞆高校教頭)は、藤井氏と5人の3年生の強い信頼関係を感じたと言う。「優勝の瞬間、藤井先生は拳を振り上げ喜びを爆発させたが、先輩達は勝っても平然としていた。今思えば、先輩たちは相手と戦うと言うより、先生に教えられたバスケットを表現することだけに意識を集中させていたのだろう。勝った喜びより、先生を満足させられたという思いの方が強かったように感じられた」と語る。

5 全中以降

彦島中は女子部も強く、昭和55年と58年に中国選手権で優勝し、57年の第2位での出場を含め計3回全中に出場している。藤井氏は、16年間彦島中に務めたが、女子部顧問の村田実氏とともに、女子の指導にも携わった。この頃、後に全日本でも活躍した二見由美

子選手を輩出している。

彦島中を出た後は、教育委員会勤めと学校現場での管理職の往復だった。教頭時代も校長時代も、現場に戻ったときはバスケット部の指導を手伝った。定年前の最後の2年間は、校長として、再び彦島中学校に着任した。「彦中の校長の時、ベンチでテクニカルファウルをとられたので、指導するのはもうやめたいや」と笑う。通算18年。教員生活の半分は彦島中で過ごしたことになる。定年退職後も教育委員会や下関短大などに勤められ、現在に至っている。

若い教員には、「苦しいことがあっても逃げるな。例え失敗しても、全力で立ち向かえ。そうすれば、いつか『あんなこともあった』と笑って話せるときが来る。逃げたことは、一生話ができないぞ。」と説いた。中島みゆきの名曲「時代」の一節とも重なるこの言葉は、藤井氏の仕事への向き合い方が、バスケットへの向き合い方と何ら変わらないことを物語る。

6 熱き思い

藤井氏の指導は、高校の3年間、渡辺氏の元で培われた基礎基本を大切にする豊浦のバスケットを土台に、自分で考え抜いて実践し築き上げたものである。教員生活をスタートさせた頃は、強いチームを作る柳井中の山根氏や華西中の岩崎氏にあこがれた。また、全国各地の強豪校を訪ね、著名な指導者に教えを請うことも重ねた。しかし、「自分にとって、バスケットボールの師と言えるのは、渡辺先生だけです」と言い切る。

バスケット人として、学校教育に携わる教育者として進むべき道を照らしてくれた渡辺氏への感謝は尽きることがない。「渡辺先生は、『恩師』という言葉では片付けられない」とも語る。

「豊浦は、学業面のハードルも高く、強豪校がひしめく全国で勝ちきることは難しい。それに比べると、中学校なら条件に差はなく、頑張れば勝てる。教え子の自分が勝つことは、渡辺先生が勝つことと同じだ」そんな思いも抱きながらの指導であった。

藤井氏は、「周囲の人に恵まれた」とよく言う。渡辺氏だけではない。豊浦進学を勧めてくれた中学校の顧問。長府中の臨採のときに引き立ててくれ、4年後に彦島中に呼び寄せてくれた校長。講堂のガラスを何枚割ろうとも見守ってくれ、最後は快く下関に送り出してくれた富田中の校長。経済的に楽ではなかった中、関東への進学を許してくれた両親と家族のことも決して忘れない。

特に両親への感謝の思いには心を打たれた。

「俺は、お前が将来少しでも楽な生活ができればという想いで大学に行かせる気はない。藤井家の人間が世のため人のためになるのであれば、俺はどんな苦勞をしてでもお前を大学に行かせてやる。」これは、平素何も言わない父親が大学進学に際して藤井氏にかけた言葉である。「この言葉が自分の怠け心を何度も正してくれた。世のため人のためにはなれなかったが、この言葉を忘れずに生きてきたことで許してもらいたい」と、当時を懐かしむように話す藤井氏の姿が印象的であった。

バスケットで結果を残し、世話になった方々の恩義に報いたいという思いがいつもあった。それは、自分が選んできた道が間違いではなかったことを自身に証明したいという思いとも重なった。これが、藤井氏がバスケットにかける情熱の、大きなエネルギーの源であった。

別のエネルギー源もあった。反骨精神、あるいは「怒り」と言ってもいいかもしれない。若い教員時代、ある人に「先生の目標は何か」と聞かれ、「全国優勝です」と答えると、

「そねえな夢みたいな話はええから、まずは県優勝くらいにしちよいたらどうか」と言われた。その場で言い返すことはしなかったが、「今に見ちよけよ」と思った。

かつて、県審判長であった山田隆道氏が、ある全国会議後の懇親会で、日本協会の重鎮に山口県のバスケット界を「日本の辺境地」と揶揄されて悔しい思いをした話を聞き、「絶対やっちゃるけえ。見ちよけよ。」との思いがふつふつと湧いてきた。地元山口県への愛着、熱い思いは、人一倍なのである。

それ故、自分の優勝よりも、その後に山口県のチームが全国大会で次々と素晴らしい成績を残し、確固たる地位を築いたことがうれしいと語る。事実、彦島中優勝の後、堰を切ったように長府中（昭和 57 年 3 位、昭和 63 年 3 位、平成 8 年 3 位）、東部中（昭和 61 年 2 位、平成 9 年 2 位）、小野中（平成 11 年 3 位）と、全中の上位入賞校が生まれている。

長府中の小西監督、東部中の小林監督は、良き仲間でもある。富田中時代、藤井氏は山口市の湯田中に務めていた豊浦の 2 年先輩の小林氏を訪ね、コーヒー一杯で夜更けまでバスケット談義をすることがよくあった。6 年後輩の小西氏とは、互いにコートと番号を書いた紙を手元に、電話越しに作戦を議論した。彼らはたまに息抜きに関門海峡で釣りをしている仲間でもあった。また、前述の 1 年先輩である吉永氏とは、ことある毎にバスケット談義に花を咲かせ、技術指導面はもちろんのこと精神面でも大きな支えであった。

藤井氏は山口県中学校のパイオニアである。それまでに道を切り拓いて来られた諸先輩方の延長ではあるが頂点を極めたのは彼一人である。想像もできないくらいエネルギーを持った男である。

私が初めて全国の切符を得た試合の直後、ハグをした。自分のことのように全身で喜びを表現してくれたことは忘れない。人間味溢れる熱い男である。

ユーモアのセンスも抜群である。とにかく、人を引きつけるのが上手い。酒も強かった。カラオケもうまく、どんなに疲れていても最後まで付き合っていた。人間関係を大切にしている人間であった。生徒に対してもそのスタンスは変わらなかった。

藤井氏は、二年後輩ではあるが人生の先輩であると思っている。どうにかして追いつこうと目標にしてきた。ライバルでもあり、尊敬できる指導者、友人である。藤井氏と知り合え、ここまで来れたことを幸せに思い、感謝している。

（小林正氏手記（令和 4 年 8 月））

「へたくソでもいい。全力でやろう！」「辛抱すること！」これが、藤井氏のモットーである。勉強時間や家族との時間を犠牲にして長くきつい練習に付き合ってくれた生徒と、快く送り出してくれた保護者には感謝しかないと語る。試合で活躍した選手も、そうでない選手も皆可愛いし、何より皆高校へ行ってもバスケットを続けてくれたことが嬉しいと語る。下関市内のほとんどの高校のキャプテンが彦島中の卒業生だったこともある。

厳しい練習の中には、生徒には理不尽と思えるようなものもあったことだろう。彦島中時代に何十キロも離れた試合会場まで走って行かせたという逸話も伝えられている。しかし、「先生のことが嫌いという生徒を聞いたことがない」と林哲郎氏は言う。二度目の彦島中勤務のあと教職を離れる時、卒業生が集まり盛大な会を開いた。そこには、バスケット部員だけでなく、生活指導で手を焼かせた卒業生も多くいた。皆、藤井氏を慕い懐かしんで集まった。

富田中の卒業生たちも、毎年藤井氏を囲んでOB会を開いてきたが、ここ 2、3 年コロナで開けていない。「先生と出会ったおかげで、今も審判活動が継続できる体力がついたし、

50年来の友人も得た。先生には『感謝』の二文字しかない。古希と令和2年叙勲のお祝いを早く皆でやりたい」と広崎氏は語る。

自分の好きなようにバスケットボールをさせてくれた家族にも、深く感謝している。卒業後も親交があり、御自宅も度々訪れている林哲郎氏は、「藤井先生もすごいが、奥様もすごい。いや、奥様がすごい」と語る。強化練習中の夜食の世話など、奥様の活躍は藤井氏の指導の一翼も担っていた。内助の功どころではない。松江全中にはじめて奥様とまだ小さかった長男を連れて行った。勝った後、奥様の第一声は、「もう、これでいいでしょう」。そのひとことに、藤井氏はかけた苦勞の大きさに思いを至らせたと笑う。

三人のご子息は、皆、豊浦高校に進学し3年間バスケットを続けた。一緒に遊んだり旅行に行ったりした記憶はないが、父親の背中を見て育ててくれた。それだけで満足だと言う。

7 これから

これからの山口県バスケットに必要なことは何か。藤井氏は次のように語る。

人口減少、少子高齢化が進む山口県において、いかに競技者人口を維持するかが大切だ。そのために必要なことの一つ目は、バスケットを盛り上げるコンテンツ作り。子どもは、「あこがれ」からスタートする。ペイトリオッツの最終戦には2500人も集まった。宇部市協会は頑張った。県協会と市協会が連携して、子どもが、見て憧れるバスケットを作り上げていくべきではないか。ライバルは多い。他競技だけでなく、これからは汗水垂らさずに出来るeスポーツも強力なライバルだ。

二つ目は、人と人とのつながり。「親がバスケットをやるから子どももやる」ケースは多い。直接の親子でなくても「知っているおじちゃんややっているから」・「近所のお姉ちゃんがやっているから」という子どもをもっと増やしたい。だから今、バスケットをやっている人は、もっと積極的に関わってほしい。特に、教員は、「自分もバスケットを教えてみたい」という生徒を育てて欲しい。そのためには、自分自身が尊敬され、憧れられる存在にならなければならない。

自ら実践してこられた藤井氏の言葉は、重い。

終わりに

藤井氏の御自宅を訪ねたのは8月の暑い最中であった。居間には、瑞宝双光章(令和2年)をはじめ、山口県選奨(平成30年)、中国バスケット協会功労賞(平成30年)、山口県スポーツ功労賞(平成24年)などの賞状が掲げられており、バスケット界だけでなく、学校教育や社会教育に残した足跡の大きさを物語っていた。

数多の賞状とともに、少々古びた一枚の写真が飾られていた。全中優勝から学校に凱旋した時の写真である。その写真に目をやりながら、「長いことバスケットにお世話になっておきながら、お返し出来たことは、全国大会に風穴を開けたことくらいかな」と感慨深げにつぶやかれたが、ご謙遜が過ぎる。

近年、山口県のバスケットは、「全国優勝」こそないものの堅実な結果を残している。今年の中には男子・田布施中と女子・麻里布中が出場し、決勝トーナメントまで進んだ。また、ミニ国体では4種別すべてで本国体の出場権を獲得した。全種別の本国体出場は、コロナで中止となった昨年と一昨年をはさみ、3回連続である。さらに成年男子は前回(令



和元年)に続き、3位入賞を果たした。決して一朝一夕に成せるものではない。

多くの先人が未開の地を切り開き、努力を引き継いで築き上げた礎の上に、今日の山口県バスケットの隆盛がある。その歴史の中に、恩返しの情と郷土愛に裏打ちされた藤井氏の努力の結実が、燦然と輝く金字塔として刻まれていることをかみしめながら、御自宅を後にした。

(文責 顕彰委員会)